
セカイノハテ（改）

希沙良 栖依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカイノハテ（改）

【Nコード】

N6345R

【作者名】

希沙良 栖依

【あらすじ】

前に書いていた『セカイノハテ』の改変版です。

異世界に飛ばされた聖夏（主人公）が、いきなり殺されて、その国の皇子の体で目覚めて自分を殺した人間に復讐しようとするシリアスな話に見せかけた、残念な自国の状況にみかねた主人公が普段の生活をエンジョイしつつ、国を救う話です。

基本的に軽めのさらっと読めるものになるかと……。

第一話 幽霊になりました（前書き）

このあたりは前とずいぶん変わっているかと。

第一話 幽霊になりました

聖^{せい}夏は死んだ。

いきなり、殺されたのだ。

彼がそれを理解したのは、自分の首が血の線を引きながら地面に転がっていった時だった。

なぜ、自分は自分の、胴体のない首を見ているのだろうか？

なぜ、自分の頭のない身体が地面に横たわっているのだろうか？

聖夏は自分のみたものが信じられなかった。だが、今、足元に転がっている首は確かに、自分の顔だった。

あまりに、酷い光景に吐くことすらできず、息が止まる。

もし、本当に自分が死んだのなら、今の自分は何なのだろう。

（もしかして・・・、いや、もしかしなくても、今の俺は幽霊なのか！？）

.....

（ふむ、まさに、その幽霊なわけだが・・・。まさか、落ちて早々に殺されるとは・・・。）

誰に聞こえるはずもない俺の叫びに、まさかの返事が聞こえた。

（ちよっつ、お前誰！？）

気がついたら俺の横に長身の男がいた。

（あゝ？私か？お前をこの世界に送った神様だけど何か？）

神様（？）は腰まであるさらさらの髪を払ってポーズを決めた。
綺麗な銀髪が俺の眼に映る。

その瞬間、俺はこいつは関わってはいけない、いや、関わりたくない人種（？）だと思った。

思いつきり胡散臭い。そして、とてつもなく、腹が立つ。

（なあ、うざいから殴っていいか？）

（やめてくれ。殴られると一応痛いんでな。

さっきのはなに、ジョークというやつだ。

人間、無駄にテンションの高い奴がそばにいたら、たいがい冷静になるものだろう？どうだ？落ち着いたか？）

確かに神様（？）に言われたように俺は冷静になっていた。まあ、どっちにしろ腹はものすごく立つが。

（あ、確かに。じゃあ、冷静になったことだし教えてくれ。何が、
どうして、こうなったか、だ。

というか、お前本当に神様なのか？）

（先に言っておこう。私は確かに神様だ。と言っても私は、この世界の、神だな。）

（どういう、意味だ？）

うそくせーなあ、うん。まあ、もう死んでるしどうでもいいか。

俺は、自分の死体を見ながら普通に会話するってシニールだ……、
と死体を見つつ質問する。

改めて見ると、いや、改めてみても、自分の死体ってエグイな。

（――で、――だ――で、――だ――）

あー……、俺の首が胴体とサヨナラしたのは、俺の胴体部分が倒れている前で、血塗れの剣を持って立っている、とてもじゃないがカッコいいとは言えない残念な顔の金髪くんの仕業だろうなあ。

よし、呪い殺す！！

（……………おい、君。聞いているのか？）

って、あっ、おいつ、金髪野郎の周りにいた取り巻きっばいやつらー！！俺の身体どこに持っていく気だ！？

（おい！ 君！！ 聖夏！！！！）

（ふおっ！？）

び、びっくりした。思わず変な声が出たじゃあないか。

（驚かすなよ！ 何だよ！）

（何だよ！ じゃない！ 君、人の話を聞いていなかっただろう）

（人じゃなくて神様だろう？）

とりあえず上げ足を取ってやった。

あゝ……俺の身体が……どこに行くんだ……。

（はあ。君の気が散るようだから場所を変えよう。あと、君の身体は後で回収するから今はこちらに集中したまえ）

第二話 ミスばかりの神様（前書き）

お久しぶりです。遅々として進まず……。申し訳ない。

第二話 ミスばかりの神様

それで、ここはどこだ……？ 確かにさっきまで外にいたはずなのに。

俺は今、すごくきらびやかな部屋の中央あたりに立っていた。その部屋を見て、俺が第一に思ったことは広い！ のただ一言。多分、俺の部屋が4つか5つ入るんじゃないんだろうか。いや、もしかしたら、それ以上かも。

……にしても、なんというかファンタジー小説にでてくる城の一室みたいというか……

俺の正面にいた神様（？）が茫然としている俺に声をかけてきた。

（ここは、さっきまで私たちが外から見ていた城の中の一室だ）

（さっきまで見ていた？）

すごく大きいため息をつかれた。あれ、俺何か悪いこと言った？

（君、自分の死体以外に視野がいつてなかったようだね……。君が殺された場所がこの城の庭だったんだよ）

ほうほう。（んで？）

（君が聞いていなかったようだから一から説明しなおすが、私は神だ。そして、この部屋と先ほどの者たちの格好を見ればうすうすわかると思うが、ここは君のいた世界とは違う。よく言う異世界というやつだな。そして、一つの世界につき神が一柱いる。

もちろん、君のいた世界にも神がいた。そして少し前に、言ったように私はこの世界の神だ。）

神様って一柱だけじゃなかったんだなあ。それじゃあ、宗教的には多神教のほう合っているのか。ん？けど、世界一つ単位で見たらその世界自体の神は一柱なのか？あれ？……まあ、どっちでもいいか。関係ないし。俺、宗教観薄いし。

（ふむ……わかった。じゃあ、なんでおれがこの世界に来たかわかるよな、この世界の神様なら。）

（当然。——君がこの世界にきた理由はねえ、私が呼んだんだよ。君のいた世界の神に許可をもらってね。ただ、少しミスをしてだな、この部屋に君を落とすつもりだったのに、少々落とす位置の座標がずれて、君は先ほどの者たちの真上に落ちた。それで、君が着地するとき、それはもう見事に、あの者達にいた金髪の者の顔面を踏んでしまった。それで、無礼者ということで）

（首が？）

（そう首が。こう、スパンっと）

神様（？）はご丁寧に、自分の首の前で手を右から左へ斬る真似をした。

（じゃあ、ここにキチンと落ちていたら死ぬことはなかった、と？）
（そう！ その通り！）

嬉しそうに、顔を輝かせて言うな。

諸悪の根源が笑顔で同意してくるから、いらっとして思わず手が出てしまった。

（全部お前のせいじゃねーか。）

地を這うような声を出しながら俺は神の胸ぐらを掴んだ。

（お前のせいで、来たくもない異世界に連れて来られて拳句、お前のミスのせいで殺されたのか、俺は。）

俺が、神様（？）の胸ぐらを掴んだ反対の手を拳の形にし、勢いよく奴の顔面に、たたきこんでやろうとしたら、神様らしいくせに、

こいつはただの人間の幽霊を怒らせただけとは思えない慌てぶりで早口にまくしたてた。

てか、いまさらだがこいつ本当に神か？

（すまない、謝るから殴るな！ 神だって殴られれば痛いんだから。ちゃんと説明するからやめてくれ。）

（ほう？ 納得がいく説明だろうな？）

（当たり前だ！ 君はある皇子と魂を入れ替えようと思って連れてきたんだ！）

（は？なんだ、その皇子と魂を入れ替えるってというのは。）

全く意味がわからない。思わず俺は、こいつ頭大丈夫か、という目で相手を見てしまった。

（あゝ。まずそれを説明するには、この事を理解してもらわねばならないんだか……。……君、パラレルワールド、分かるか。）

俺はいきなりの神の質問に眉をしかめながら、漫画や小説などで得た知識を話した。

（確か、自分のいる世界の隣に別の世界があって、そこにも自分がいて、この自分と微妙に違う生活を送ってる、ってやつだったか。）

（そうそう、それ。だいたいそれで合っている。で、それなんだが……。……というか、君はいつまで、仮にも神様の胸ぐらを掴んでるのかな？）

そういわれ、俺はしぶしぶ、本当にしぶしぶ手を離した。

神は崩れた襟元を直しながら、説明を続ける。

（まあ、これは特殊なんだが、君にはパラレルワールドみたいで、この世界に別の君がいるのだよ。ん？こういう場合はドッペルゲンガ-というのか？……とにかく、この世界には君のそっくりさんがいるんだが、その君がこの国の3人の皇子のうちの1人というわけだ。しかも長男。しかし、彼は、身体が弱く、今にも、死にかけている。そして、後継者がそんな状態にかかわらず、2年ほど前から、この国の皇帝は病に伏している。そのような状況で残り2人の皇子はそれほど能力に差がなく、ほぼ同時期に生まれた者たちと来ている。だから、もし、一番上の皇子が死んだら間違いなく後継者の問題が起こるだろう。この国はこの世界の中心と言って過言ではないほど大きな国だ。そんな国で今、皇帝の後継者が死んで後継者争いが起こると他の国にまで飛び火して多くの問題が起こる。それを回避したいのだよ。）

（そんなことのために神が出張ってるのか？）

俺は不審に思った。

神様っていうものはもつと世界に干渉だと思っていた。

じゃないと、神がそこらじゅうで介入してきて、地球はもつと豊かで、ほとんどの人は幸せになっていないとおかしい。正直に疑問をぶつけてみた。

（ああ。それは、この世界がまだ出来て間もないからからそんな状態で戦争が起き、さまざまな問題が生じるとさすがに世界全体のバランスが色々と崩れてまずいから私が介入しているのだ。……君をこの世界に連れて行くという方法だね。）

俺はこめかみが引きつるのを感じた。

（ほーお、じゃあなんだ、俺は見知らぬ世界に完っ全にそっちの都合で連れて来られたのか。）

俺はものすごくいい笑顔だったと思う。ニッコリ、と効果音がつきそうなほどに。

……だけど、きっと神には俺の背後から黒いオーラが見えていることだろう。

仮にも神様だろうに、神は冷や汗を出していた。

（……ま、まあ、そういう事になるな。だ、だが、完全にこっちの都合というわけではないのだ。

……実はだね、本来、君の魂は此方で産まれるはずだった。しかし、……まあ、神にも色々あるんだよ、うん。と、いうわけで手違いで君の魂が地球のある、まあ、私達神はクシラとその世界を呼んでいるのだが、そのクシラの方で産まれるはずだった魂と入れ替わってしまった。）

（は？って、事は本来、俺がこの世界で皇子やってたのか？……そして本来クシラに産まれるべきはずの魂が、こっちで皇子やってたってことか。）

というか、ミスしすぎだろう、神様。座標間違えるわ、魂まちがえるわ。

（そういう事。まあ、当然、本来あるべき姿とは違うから多少のゆがみが生じてしまった。

オウラが、ああ、こちらの君の名前なんだが、まあ、そのオウラが病弱になったのはそういう理由なんだが………っと、喋りすぎたようだ。そろそろ時間がない。オウラの魂が限界のようだ。隣の部屋に行こう。そこに、オウラが寝ている。）

は？時間がない、って、ほとんど、説明できていないじゃねえか！
ってもう、神はそこから動いて正面の壁に向かって歩いている。

え、壁？

（ぶつかるだろー！）

（ぶつかる、って君は今は幽霊だろう。壁ぐらいすり抜けるに決まっているだろうが）

神は歩きながら、呆れたように、こちらを向いて言い放ち、君も早く来い、と言うと壁をすり抜けていった。

確かに、そりゃそうか。自分が幽霊だつていうことを完全に忘れていた。しょうがないから俺も正面の壁をすり抜ける。扉をあける必要がないってある意味便利だな、幽霊。

第二話 ミスばかりの神様（後書き）

誤字脱字報告、あれば教えていただけると助かります。

第三話 帰れない

壁を抜けた先の部屋はさっきまで俺たちがしゃべっていた部屋よりもさらにでかかった。もう、ここまででかいと腹も立たない。逆に掃除がめんどくさそうだとすら思ってしまう。

あとで分かったことだけど、さっきの部屋がオウラ皇子の書室で、この部屋はオウラ皇子の寝室だった。他にも数室、衣装部屋など、いろいろ用途別に部屋があるって知ったときには、1部屋で十分だろっておもったね。

神がいるところまで、移動する。神はベッドの近くに立っていて、どうやら、誰かがそこに寝ているようで、ベッドには、その大きさには不釣り合いな小さな膨らみができていた。ま、誰かが寝ている、って言うてもオウラ皇子の部屋なんだからオウラ皇子が寝ているに決まってるんだけど……え？

「俺……？」

何か病気にかかっているのか、あまり食べていないのか、やつれているが、確かに、俺そっくりだった。髪が紅いのを除けば、だけど。

「そう、君そっくりだろう？ この死にかけがオウラだ」

「死にかけって……ひどいな、おい。」

「いやしかし、死にかけは、死にかけだしな。ちなみに、この者は13歳だ」

「は……？」

俺が17歳だから、4つ違い？確かに、ちょっと顔が幼い気がするけど、マジで？

「いやー、『クシラ』とこの世界『フォルテア』とは、時間の進み方が少し違うものでね。『フォルテア』は『クシラ』より、いささか時間の進みが遅いのだよ。」

へえ、じゃあ、もしできたら、リアル浦島太郎ができるなあ。
あ、やべえ。なんか色々あつて、現実逃避し始めた、俺。

「まあ、それでもいいんだ」
「いいのかよ！」

お、思わずツッコんでしまった。俺はいつも無茶苦茶言つて、ツッコまれる方なのに……。現実に引き戻されたわ！俺は、現実逃避すら許されんのか！

「そう、どうでもいいんだ。そんなことより、時間がないと言つただろう。オウラの魂が完全に消耗して消えてしまうと困るのだ。さて、今からオウラの魂をこの身体から引き剥がす。そして、このオウラの体に君の魂を入れて、君の身体にオウラの魂を入れる」

「質問。俺の身体に俺の魂は戻せないのか？　それで元の世界に帰れないのか？」

神は勝手にどんどんやることを決めているけれど、話から、どう考えても俺が元の世界に帰れそうにないんだが。一応、元の世界に親友もいるし家族もいるから、帰りたい。

「両方無理だ。あきらめることだな。元々魂が入れ替わっていたんだ。今から行うことは、本来の状態に戻すだけの事だから可能なんだ。ちなみに、わざわざこちらの世界に、君の身体ごと呼んだのは魂だけでは異界渡りができないからだ。もしそのようなことを行つ

ていたら今頃君の魂は粉々だから」

さらっと酷いことを言われた……粉々って……。

マジか。帰れないのか。あー……。諦めるしかないのか。

俺が黄昏ている間に、神は説明は済んだとでもいうように、手を合掌して、何やらつぶやいた。そうすると、オウラの寝ているベッドの横当たりの床の上が光った。光の大きさとしては人一人入りそうなくらい。その光が収まるとそこに、確かにさっき首が切られて血まみれになっていたはずの俺の身体があった。

「うわっ、綺麗になってる！　なんで！」

確かにあの時首と胴体がさようならしたはずなのに、綺麗にくっついていて。血まみれになっていた俺の学校の制服には血の痕ひとつ残っていない。

「さすがに、あの状態のままで君の身体にオウラの魂を入れたら、その瞬間に死んでしまうだろうが」

呆れたような視線でみられた……。確かにその通りです……。

「さて、これで準備は整ったな。それでは」

神は次はオウラに近づいて彼の胸にの当たりに手をかざした。すると、オウラの胸の当たりから淡い掌大の光が現れた。それはときおり、明滅しながら神の掌の上に収まった。

「それは？　オウラの魂？」

「その通りだ」

そう言いながら神は右の掌に乗せたオウラの魂に左手をかざした。すぐに、俺の身体にオウラの魂を移すものだと思っていた俺は何をやっているのか興味津々で見ることにした。

オウラの魂にかざした左手が離れていくとそれについて行くかの

様に、オウラの魂から二回りほど小さい光が引き出された。

「こちらの光はオウラの記憶だ。『フォルテア』で多少は役に立つだろう。それで、君の記憶も欲しいのだが、少しこちらに来てもらえるか」

「別に俺の記憶をオウラにやるのはいいんだけどさ、その分の記憶が俺から記憶が消えたりしないよな」

「それは大丈夫だ。記憶のコピーみたいなものだからな」

神は俺の身体の胸当たりにオウラの魂を押し込んだ後こちらを向いて俺の額にあいた右手をかざした。俺の記憶が抜かれる時は、うん、まあ、何とも言えない感じだった。あえて言うなら脳がかゆい、かな？ まあ、気持ちのいいものではないのは確かだな。その後、俺の記憶を俺の身体、いや、もうオウラか。オウラの額に押し込んだ。「なあ、めっちゃ苦しそうなんだが」

「うわあ、真っ青だよ、顔。なんか死にそうな呻きがきこえるんですけど。」

「当たり前だろう。17年分の記憶を3カ月ほどで追体験できるようにしたからな。これから3カ月は昏睡状態だろうな。君も今からオウラの記憶が押し込まれてそうなるが」

マジか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6345r/>

セカイノハテ（改）

2011年10月7日13時57分発行